

清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（6）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (6)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

（iii）『文家模範』

王企妃の『文家模範』（乾隆三十一年〔一七六六〕刊）は、立柱（ひとつの意味をふたつの柱に分ける）を次のように解説する。

〔一分柱〕金針詩に云う、出股 忙留し、對股 言う、と。當に預め先に兩意を立定し、分かちて股柱と爲すべきを謂う。或いは一意もて分かちて兩層を作る①。或いは對比（對句の後の句）もて前比を翻轉す。或いは一開一合②もて、或いは一反一正③もて、或いは一賓一主④もて柱子を立定す。須く句句 相い^{したが}跟い、字字 相い應ずるを要すべし。大股の文字の如きは、起承轉合⑤ 俱に柱の意に従いて落想（構想）す。草蛇灰線⑥の妙有るを要す。股末 又た必ず須く本柱を勒轉（引き締めて展開する）すべし。

陳大士（陳際泰：字は大士。江西臨川の人。隆慶元年〔一五六七〕～崇禎十四年〔一六四一〕。崇禎七年〔一六三四〕甲戌科三甲二百三十一名の進士）先生 云う、毎に一物を見るに即ち^{ママ}兩面を成す。正有れば即ち反有り、〔それは〕則ち反を以て正に^そ陪わす。深有れば即ち淺有り、〔それは〕則ち淺を以て深に^そ陪わす。一兩の字を増減し、即ち兩股を成す。此れ即ち所謂ゆる流水對法⑦なり（『文家模範』不分卷・十九葉・「一分柱」条）。

- ①一意分出兩層：本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（5）」（『經濟理論』第333号）114頁「①一意分出兩層」条参照。

- ②一開一合（闔）：『斯文規範』に「前の一股は是れ開にし、後の一股は是れ闔（合）にするを言う」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一開一闔」条）。
- ③一反一正：『斯文規範』に「前の一股は是れ反にし、後の一股は是れ正にするを言う」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一反一正」条）。
- ④一賓一主：『斯文規範』に「前の一股は是れ賓にし、後の一股は是れ正にするを言う」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一賓一主」条）。
- ⑤起承轉合：本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（2）」（『經濟理論』第327号）69頁「⑦起承轉合」条参照。
- ⑥草蛇灰線：『文家模範』に「〔草蛇灰線〕此れ埋伏の法なり。蛇の草中に伏し、線の灰中に埋まる、之を看て見えず、之を按じて實に有り。書旨の重き處の下に在り、顧みざる可からず、又た明らかに顧みる可からざるが如ければ、須く暗暗として文中に埋伏すべし。又た或いは篇中に知・行・才・徳もて分柱するも、股内 並びに知・行・才・徳等の字面を露わさず、意 自ずから其の中に貫串（a）さすは、亦た此の法なり」（『文家模範』不分卷・二十四葉～二十五葉・「草蛇灰線」条）。

（a）貫串：『斯文規範』に「題中の一兩箇^{いちにこ}の重き字眼に靠住し、全題を將^もって俱^{いちにこ}に一兩箇の重き字に従いて貫串^ゆし去くを言う……」（『斯文規範』卷之五・四葉・「一曰貫串」条）。

また、『斯文規範』に「灰線草蛇は、灰中の藏線、草裏の眠れる蛇を言う。則ち之を文に通ずるに、兩股の中 頻頻と柱頭を將って明らかに應ぜんと欲せず、〔しかし〕又た斷絶す可からず、只だ字の意を用いて暗に相い照顧すること、就^{すなわ}ち灰中の藏線、草裏の眠れる蛇と相い似たるが如し。故に灰線草蛇と曰う……」（『斯文規範』卷之七・四葉・「一曰灰線草蛇」条）。

⑦流水對法：本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（4）」（『經濟理論』第329号）91頁「②流水法」条参照。

あらかじめふたつの意味を考えて柱を立てる。もしくは、ひとつの意味を分けて二つにする。對比（対句の後の句）において出比（対句の前の句）の意味を翻轉（ひっくり返して展開）する。一開一合や、一反一正や、一賓一主を用いて、柱を確定する。つまり、句それぞれがしたいが、句の中の字もそれに応じて対となるようにすべきである。長い句では、起承轉合となるようにして、立柱の意味によって構成して、草蛇灰線法のようにすることが必要である。末尾の部分は、全体を引き締めなければならない。陳際泰は、常に題目を見れば、その両面を考える、それが、いわゆる流水對法であるという。

(iv) 『簡可編』⁽¹⁾

倪承寛（号は敬堂。浙江仁和人。康熙五十一年〔一七一二〕～乾隆四十八年〔一七八三〕。乾隆十九年〔一七五四〕甲戌科一甲三名の進士）の『簡可編』は、対句を次のように説明する。

股法は、文の立柱を貴ぶものなり。立柱すれば、則ち文中に骨①有りて、股合掌せず。立柱は又た接柱を貴ぶ、則ち層層の妙義宛として一線穿珠②の如し。更に出比（対句の前の句）反なれば、則ち對比（対句の後の句）正なり。出比開なれば、則ち對比合なり。出比浅一層なれば則ち對比深一層なり。是れ兩比相い生じ、亦た一氣にして下と謂う。但だ提〔股〕・束〔股〕の分柱は、短小にして爲し易く、五六句・三四句にして便了（よろしい）。中〔股〕・後〔股〕の分柱は、則ち一比中に起承轉合③の數層あり。總じて此の主意を離れて、他意を挿入す可からず

(1) 『簡可編』の序文によると、『簡可編』は倪承寛が順天學政に在任（乾隆三十三年〔一七六八〕～乾隆三十六年〔一七七二〕）中の乾隆三十五年（一七七〇）に著し、それを汪志伊（(vii)『舉業瑣言』参照）などが増補したものである。

(『簡可編』 不分卷・七葉～八葉・「八股正論」条)。

①骨：『舉業卮言』に「骨とは體なり。人の是の體有るや、骨 之を爲すなり。肌膚の骨に生生す、皮毛の骨に附附す。内にして五臟六腑の骨に繋がる、外にして四肢九竅の骨に倚る。骨 具わり、而して體立つ、斯れ人の挺生（ぬきんでる）なる所以なり。骨の文に於けるや、亦た然り。布置する者は格（a）なり、其の格を擧げて之をして立たせる者は骨なり。流衍（満ち溢れる）する者は詞なり。其の詞を充たし、之をして健たらしむる者は骨なり。是れ文の骨有るは、亦た文の恃む所の以て體と爲す者なり。文にして骨無ければ、即ち神 揺揺（不安定）として依る所無く、氣 飄飄（動揺する）として附する所無し。格 又た安くんぞ能く振るい、詞 又た安くんぞ能く達せんや」（『舉業卮言』 卷之首・七葉～八葉・「骨」条）。

(a) 格：『舉業卮言』に「格とは體格なり。文の體格有るは猶お屋の間架（配置）有るがごときなり。屋を作る者は材木を鳩集（かきあつめる）し、必ず冒（^なけいそつ）に倣さず。必ず先ず一つの間架を立つ。[そして] 其の高下の幾何（^{いくばく}）・淺深の幾何（^{いくばく}）・廣狹の幾何なるかを定め、其の材の何れの者もて柱と爲し、何れの者もて梁と爲し、何れの者もて椽と爲すかを、一一料理して停當（ととのえる）す。然る後に之に繩墨を引き、之に規矩を繋り、豎立（立てる）起來（^{はじ}起こす）し、方めて一座の好き屋を成す。若し先ず間架を定めず、便ち斧斤を操れば、後來の豎立するの時、必ず顛倒錯亂（ひっくり返ってむちゃくちゃになる）に至り、手を措く所無し。文字を倣（^な）すも亦た此の如し。題目の手に到れば、便ち仔細に思量し、其の綱領の何くに在り・其の節目（キーポイント）の何くに在り・其の分截の何くに在り、頭上に或いは提掇（提起）を用いる該き・提掇を用いる該からず、中間に或いは過接を用いる該き・過接を用いる該（^べ）からず、末後に或い

は收繳を用いる該^べき・收繳を用いる該^べからず、某處 當に重くすべし・當に詳しくすべし、某處 當に軽くすべし・當に畧すべし、前後多寡、一一想定し、一篇の大槩をして胸中に了然たらしむ。然る後、手を下し做^なし去^ゆけば、始めて穩妥を得。若し初めの時、體格 定まらず、做^なして中間に到れば、必ず擾亂に至る。即ち去^ゆきて反復改易せば、終に停當（ととのえる）せず。是^{これ}を以て格を立つるは乃ち行文の要務なるを知るなり。先輩の杜靜臺 之を論じて極めて詳し。余 其の大要を撮りて此れを知る（『舉業卮言』巻之首・二十八葉・「格」条）。

- ②一線穿珠とは、珠 散じて線もて之を貫く、珠 分かれて線もて之を聯ぬ。之を數うれば、則ち各自 珠を成し、之を舉ぐれば則ち共に一串と成る、是れなり……（雍正六年『制義綱目』不分卷・八十葉・「文脈總論 四曰一線穿珠」条）

- ③起承轉合：本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（2）」（『經濟理論』第327号）69頁「⑦起承轉合」条参照。

股法は立柱（ひとつの意味をふたつの柱に分ける）が重んぜられる。立柱すれば、文に筋が通り、股は合掌（二股ともに同じような語句を用いて文章を展開する）とならない。立柱は、接柱（対句のつながり具合）を重んじ、その妙義はそれぞれが独立しながらも、ひとつに連なっているようなものとするものである。さらに言うと、出比（対句の前の句）が反であれば、對比（対句の後の句）が正・出比が開であれば、對比が合・出比が浅一層であれば、對比が深一層というように、対句がお互いを生かしあい、意味が繋がるようにする。提股・束股の股づくりは短いのでやりやすく、五六句もしくは三四句でかまわない。が、中股・後股の股づくりは、一比の中で起承轉合を展開する。題目の内容から離れて、別の意味を持ち込むべきではない。

(v) 『論文約旨』

張泰開の『論文約旨』⁽²⁾は、対句を次のように説明する。

〔論對股〕陳大士（陳際泰）先生 嘗て自ら言う、「文を爲すは、獨り得て分股に在り。前人の八股を定め爲す者は、之を言いて已まずして、再び之を言う。必ず是の如くして而して後に盡すと爲すを明らかにするなり。若し每股 合掌（二股が同じような語句を用いて文章を展開する）すれば、則ち四股もて可なり。何ぞ必ず八股ならん。其の病 且に一股を并せるを將^もつて之を忘れんとするなり。蓋し對股（対句の後の句）と出股（対句の前の句）とは、一字も同じくせず。對股 既に嚴にして而して後 出股 ^{おろそか}苟にせず。若し概（一律にする）して之を同じくせば、則ち出股は接句を論ずる無く、即ち開頭の一句、已に^{おろそか}苟にし思い無し」と。其の言 最も痛切と爲す。故に毎に二股を作るに、必ず須く先ず^{ふたつ}兩箇の柱の義を想出し、然る後に落筆（筆を下す）すべし。〔そうすれば〕便ち此の柱義を將^もって題目に^{あた}當了り、自ずから意思の生出する有り。凡そ字句を用うる處 俱に一一貼定し、彼此互いに易うる可からず。何ぞ工みならざるを患わん。若し隨手（無造作）に一股を寫き得れば、則ち第二股は先ず主意（定見）無し、復た何の意有りて對す可けん。勢い必ず但だ字句を換えるに於いて合掌を爲すに至らん。立柱に至れば、或いは柱を明らかにするあり、或いは題字に就きて柱を作るあり、或いは〔題目の〕上の〔箇所の〕文字に就きて柱を作るあり、或いは一比淺・一比深あり、或いは一比開・一比合あり、或いは一比反・一比正あり、或いは流水對①・循環對②を用うるあり、亦た起講の中に於いてす可きあり、或いは起股 兩柱を立て、通篇 分頂到底するあり。總じて一處の合掌有らしむ可からず。卻って一股中に於いて兩意を夾雜（ごっちゃにする）して内に在る可からず。又た立柱 當に用意を貼定すべし、但だ字

(2) 『論文約旨』については、本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について (3)」87頁の注 (1) 参照。

面（表面上の言葉）を點入するを得ず。但だ字面を用い、意 分別せざるが若き者は、究に合掌に異なる無きなり。股中 題中の字及び「題目の」上の文字を用うるに至る者は、以て另外に對を作る可からず。又た立柱は當に股頭に於いて掲出すべし。[そうすれば] 方に根（^{まさ}根（拠りどころ）有りて目を醒まさしむ。先輩の「我愛其禮」（『論語』八佾）題の「告朔明有尊也」と「告朔明有親也」・「其供之有司也」と「其微之自民也」,「君使臣以禮」（『論語』八佾）題の「臣實可以情使」と「臣實可以分使」・「莫和於禮之用」と「莫嚴於禮之辨」,「孔子曰知禮」（『論語』述而）題の「上之不有廷評可訪乎」と「下之不有輿論可採乎」・「周公稱制禮之宗而君周公之裔也」と「魯又號秉禮之國而君實國之主也」,「夫子欲寡其過而未能也」（『論語』憲問）題の「嘗致嚴於心思而猶恐有越思」と「嘗致詳於躬行而猶或有過行」,「作者七人矣」（『論語』憲問）題の「上焉不與吾君共廟堂」と「下焉不與吾民興教化」・「天地之生才無盡」と「國家之用人有數」の如きは、總じて是れ一句を立定（決定）し、以て下 靠定し發明す。以て隅反（類推）す可し（『論文約旨』「論對股」条・不分卷・七葉～八葉）。

①流水對法：本稿「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（4）」（『經濟理論』第329号）91頁「②流水法」条参照。

②循環：「循環」ではなく「回環」ではあるが、『制義綱目』に「回環は、題に二意有り、上を帶びて下を疏し、下を疏して上を顧みる、是れなり。滾題の後半、之を多用す」（雍正六年『制義綱目』不分卷・六十三葉・「回環疏」条）。

出股（對句の前の句）と對股（對句の後の句）の二つの股を作るのに、二つの柱を作することを想定して作成すべきである。その柱の意味を題目に相当させ、自分の文章の意味を示す。すべての文字は、ひとつひとつ定めて、出比と對比とで交換するべきではない。うまく書く必要はない。無造作に出比を書けば、對比に意味がなくなってしまう、對句にならず合掌（二股がともに同じような語

句を用いて文章を展開する) となってしまう。立柱(ひとつの意味をふたつの柱に分ける) には、「明柱」・「題字に就きて柱を作る」・「上の文字に就きて柱を作る」・「一比淺・一比深」・「一比開・一比合」・「一比反・一比正」・「流水對」・「循環對」などの解法を用いる。総じて言うと、少しの合掌もあってはならない。しかし、對句の片方の句の中に二つの意味を雜ぜてはいけない。柱を立てるには自分の意図を入れるべきであり、題目の文字をつまみ出して当てはめてはいけない。題目の文字を用いて、意図を二つに分別できないのは、合掌と異なることがなくなってしまう。股の中で題目の文字や、截去された題目の上の部分の文字を用いたならば、その對となるものを作りださなくてもよい。さらに、柱を

✓(3) 滾題とは、お互いの内容が密接にかかわっている箇所を題目としたもの。滾作題となっているが、『初學題類文法合編』によると、

「季路問事鬼神。子曰、**未能事人，焉能事鬼**。曰、敢問死。曰、未知生，焉知死」(『論語』先進)、

「滕文公問曰、滕小國也、問於齊楚、**事齊乎，事楚乎**。孟子對曰、是謀非吾所能及也。無已、則有一焉、鑿斯池也、築斯城也、與民守之、效死而民弗去、則是可爲也」(『孟子』梁惠王下)、

「子曰、論篤是與、**君子者乎，色莊者乎**」(『論語』先進)

などの題目(太字で示したところが題目)が、それにあたるといふ。そして、次のように説明する。

滾とは滾なり。題句 分かつと雖も、題氣は則ち緊なり。緊なる者は之を分かつて、則ち緊ならず。故に必ず滾を以て之を出だす。或いは合わせて説く、或いは流水もて説く、或いは倒跌①もて説く、或いは羅紋②もて互いに説く、或いは題に順いて串き③説く、或いは雙起側落④もて説く。總じて宜しく平列對舉すべからず。此れ定法なり(光緒五年[一八七九]新鐫『初學題類文法合編』上卷・五葉・「滾作題」条)。

①倒跌：『斯文規範』に「**跌**」字の本義は、本とせれ足の據を失うを言うなり。既にして「**倒**」字と配を作せば、則ち「**跌**」字は便ち「**落**」字と異なり無し。題 係れ兩截なれば、既に上截(題目の截去された上の箇所)より順い入り、下截は復た下截(題目の截去された下の箇所)より倒落して上截を出だすなり……」(『斯文規範』卷之七・四葉・「一曰倒跌」条)。

②羅紋：『制義綱目』に「題に依らず敷衍し、縦横に之を收拾するなり。長題 多く此の法を用う」(『制義綱目』不分卷・四十葉・「羅紋」条)。

③串：『制義綱目』に「串とは、兩つを貫きて一と爲し、散を聯ねて以て整と爲す。外に轉接の跡を泯し、内に密移の妙有り……」(『制義綱目』不分卷・五十五葉・「串疏」条)。

④側落：『斯文規範』に「側は一旁なり。題中の條件 多ければ、重からざる者を將つて先ず點じ過し、重き處を單落す、故に側落と曰う」(『斯文規範』卷之六・二十葉・「一曰側落」条)。

立てた意味を最初の部分ではっきりと示すべきである。そうすれば抛りどころができて注意を引くことができる。

（vi）『初學題類文法合編』

光緒五年〔一八七九〕新鐫『初學題類文法合編』は、股法を次のように解説する。

輕敘①有り、重發②有り、開合③有り、流水④有り、平對⑤有り、裁對有り。其の法 一ならず。總じて、每股 各々の立柱の意、柱を抱き一線もて説き下り、方に紀律有るを要す。題の二つの意に分作し難き者に至るに、須く一を以て兩つに化する（以一化兩）の法を知るべし。或いは淺・深もて變換するを以てす、或いは横・豎より説き來る。決してわずか稍も合掌有る可からざるなり（『初學題類文法合編』下卷・七葉・「股法」条）。

①輕敘：『斯文規範』に「上面の輕き者 輕輕として敘過するを言う……」

（『斯文規範』卷之六・二十五葉・「一曰輕敘」条）。

②重發：『斯文規範』に「題中の重き者に於いて重重として發揮するを言う。輕き者の止だ輕輕として敘過するに比べざるなり（『斯文規範』卷之六・二十七葉・「一曰重發」条）。

③開合：『制義綱目』に「開合とは、或いは先に反し、後に正す、或いは先に實に後に虚なるものなり。反なる者は開と爲し、正なる者は合と爲す、實なる者は開と爲し、虚なる者は合と爲す。一比開一比合なる者有り、上半比開下半比合なる者有り。開は陽に屬し合は陰に屬す。一比開一比合は此れ對待の陰陽なり。上半比開下半比合は此れ流行の陰陽なり。〔割注：四比 之を用うれば、則ち二開二合なり。六比 之を用うれば、則ち二開四合なり。八比 之を用うれば、則ち二開六合なり……〕（『制義綱目』不分卷・五十九葉）。

④流水：『斯文規範』に「兩股に屬すと雖も、實は一氣に本づくこと、一水の分れて兩つと爲るも實に同一の源なるに相い似たるが如きを

言う。故に流水と曰う」（『斯文規範』卷之三・十六葉・「一曰流水」条）。

- ⑤平對：『斯文規範』に「兩股の中，上股の反し，下股の正なる者有り，上股の開き，下股の闔^とじる者有るを言う。此れ乃ち兩股平平に之を列す。故に平對と曰う」（『斯文規範』卷之三・十六葉～十七葉・「一曰平對」条）。

股法には、「輕敘」・「重發」・「開合」・「流水」・「平對」・「裁對」などのひとつではない解法がある。つまりは、立柱の意味を最後まで貫き通し、規律があることが必要である。題目を出股・對股のふたつに分け難いものは、一を以て兩つに化する（以一化兩）の法を学ぶか、淺・深の變換を行なうか、もしくは縦・横から説明する。少しも合掌（二股ともに同じような語句を用いて文章を展開する）するようなことはあってはならない。

(vii) 『舉業瑣言』⁽⁴⁾

汪志伊（字は稼門。安徽桐城の人。乾隆八年（一七四三）～嘉慶二十三年〔一八一八〕。乾隆三十六年の舉人。江蘇巡撫（嘉慶八年〔一八〇三〕～嘉慶十一年〔一八〇六〕在任），工部尚書（嘉慶十一年〔一八〇六〕在任），湖廣總督（嘉慶十一年〔一八〇六〕～嘉慶十五年〔一八一〇〕在任），閩浙總督（嘉慶十五年〔一八一〇〕～嘉慶二十二年〔一八一七〕在任）などを歴任）の『舉業瑣言』では、(v)『論文約旨』と同じく陳際泰の解説を引用したうえで、

①一意もて翻^{くつがえ}して兩つと爲すもの。

②雙峰對峙し，精にして堅なるもの。

③一綫（脈絡）^{さいご} 到頭まで清にして且つ爽（脈絡が最後まではっきりしている）なるもの。

④立柱・接柱の法。

(4) 汪志伊の『舉業瑣言』には、乾隆五十八年（一七九三）自序と陸有仁の乾隆五十八年序がある。拙稿は、春溪居士輯・光緒十九年（一八九三）刊『棘闈奪命錄』に付されたものによる。

の四つの股法の具体的な例を示す。

股股の文章は合掌（二股ともに同じような語句を用いて文章を展開する）を^{おそ}怕る。何ぞ一意もて^{くつがえ}翻して兩つと爲すに妨げあらん。雙峰對峙し、精にして堅なり〔割注：兩比 各々精意（深遠な意図）有り〕、一綫（脈絡）^{さいご}到頭まで清にして且つ爽なり（脈絡が最後まではっきりしている）。

一篇の機局（構成） 既に定まれば、逐股（股ごと）の詞意 又た宜しく分かつべきなり。今の文を爲す者 股は皆な合掌す。語 多く是に似たり。胥^みな童子の試筆（文章の練習）に由る。塾師 必ずしも深く求めずと謂い、遂に習いて錮病（なかなか治らない病）と成り、救藥（治療）す可からざるなり。陳大士（陳際泰） 嘗て自ら言う、「文を爲すは、獨り得て分股に在り。前人の八股を定め爲す者は、之を言いて已まずして、再び之を言う。必ず是の如くして而して後に盡すと爲すを明らかにするなり。若し每股 合掌すれば、則ち四股もて可なり。何ぞ必ず八股ならん。其の病 且に一股を并せるを^も將って之を忘れんとするなり。蓋し對股（對句の後の句）と出股（對句の前の句）とは、一字 同じからず。對股 既に嚴にして、而して後 出股^{おろそか} 苟にせず。若し概（一律にする）して之を同じくせば、即ち出股は接句を論ずる無く、即ち開頭の一句、已に^{おろそか}苟にし思い無し」と。其の言 最も痛切と爲す。余 [かくのごとく]^{おも}謂えらく。一意もて^{くつがえ}翻して兩つと爲す①可きは、[陳] 大士（陳際泰）の稿中の「賜也爾愛其羊」（『論語』八佾）一節の中二比（中股）の「惜」・「少」と「貪」・「多」とを以て轉換するが如き、是れなり。又た「昔者禹抑洪水」（『孟子』滕文公下）一節の中二比の「皆前代之所經」と「豈前^{ママ}代（聖）之所開」と、後二比（後股）の「[天下之] 禍患每出於所備之外」と「[吾人之] 功名每在失意之中」、「充類至義之盡也」（『孟子』萬章下）の後二比の「甚重乎天下之諸侯」と「又甚欲警畏乎天下之諸侯」との如きは、一反（完全に逆にする）し手を覆して、遂に快論と成る者なり。後^{かえ}の其の法を宗とする者は、韓慕廬（韓焘：字は元少、又の字は慕廬、諡は文

懿。江蘇長洲の人。明・崇禎十年〔一六七三〕～清・康熙四十三年〔一七〇四〕。康熙十二年〔一六七三〕癸丑科一甲一名〔狀元〕の「孟武伯問子路仁乎」（『論語』公冶長）一章の中二比の「仁之取數至多」と「仁之爲道甚遠」とを以て勘入（追求して取り込む）する者の如き、是れなり。又た楊大鶴（字は九皋，号は芝田。江蘇武進の人。？～康熙五十九年〔一七一五〕。康熙十八年〔一六七九〕己未科二甲二十名の進士）の「巍巍乎舜禹之有天下也」（『論語』泰伯）一節の中二比の「難」・「易」の二義を以て推勘（追求）する者の如き、是れなり。雙峰對峙し，精にして堅なるは，兩股 各々精義^{ママ}有るを謂う。章大力（章世純：字は大力。江西臨川の人。天啓元年〔一六二一〕の舉人）の「君子無終食之間違仁」（『論語』里仁）の中二比の「先以待之」と「多以全之」との如き、是れなり。又た吳韓起（福建晉江の人。崇禎十三年〔一六四〇〕庚辰科三甲五十八名の進士）の「奢則不孫」（『論語』述而）一章の中縫の間の「君」・「臣」を以て分發す，章光岳（江西臨川の人。萬曆四十一年〔一六一三〕癸丑科二甲三十四名の進士）の「所惡於上」十二句（『大學』傳第十章）の後二比の六つの「所」字・六つの「毋」字に著眼して分發す，陳臥子（陳子龍：字は人中，さらに臥子に改める，号は大樽。江蘇華亭の人。萬曆三十六年〔一六〇八〕～崇禎十七年〔一六四四〕。崇禎十年〔一六三七〕丁丑科三甲十七名の進士）の「樹藝五穀而民人育」（『孟子』滕文公上）の「五穀」に就きて「因天」・「因地」の二義を掲出す，尹奇逢（湖廣嘉魚の人。崇禎四年〔一六三一〕辛未科三甲九十九名の進士）の「食之以時」（『孟子』盡心上）二句の起二比（提股）の俗情に就きて「貪天」・「效人」の二義を道破するが如き，皆な是れなり。又た儲中子（儲在文：字は六雅，一の字は禮執，また中子と稱す。江蘇宜興の人。？～？。康熙四十八年〔一七〇九〕己丑科二甲三名の進士）の「信近於義」（『論語』學而）二句の中二比の「情」と「氣」とを以て立柱す，張存素（張玉書：字は存素。江蘇丹徒の人。？～康熙五十年〔一七一五〕。順治十八年〔一六

六一〕辛丑科二甲十二名の進士）の「射不主皮」（『論語』八佾）一節の後二比の「國家」・「百姓」を以て立柱す、趙明遠（河南商丘の人。崇禎七年〔一六三四〕甲戌科三甲六十四名の進士）の「君子上達」（『論語』憲問）の後二比の「勉強」・「漸時」の兩層を推出する工夫、儲中子の「顔淵問爲邦」（『論語』衛靈公）の中二比の下に照らして「擇之不精」・「防之不密」の二義を發出す、曹一士（字は諤廷，一に諤庭，号は濟賓。江蘇青浦の人。康熙十七年〔一六七八〕～乾隆元年〔一七三五〕。雍正八年〔一七三〇〕庚戌科二甲八十五名の進士）の「君子疾没世而名不稱焉」（『論語』衛靈公）の中二比の「天地」・「父母」を以て分柱す、湯潛庵（湯斌：字は孔伯，一の字は荊峴，号は潛庵。河南睢州の人。明・天啓七年〔一六二七〕～清・康熙二十六年〔一六八七〕。順治九年〔一六五二〕壬辰科三甲百六十七名の進士。康熙十八年〔一六七九〕己未科博學鴻儒第一等十八名）の「見善如不及」（『論語』季氏）一章の後二比の「天地」・「聖賢」を以て分柱す、王己山（王步青：字は己山，又の字は漢階，号は罕皆。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年〔一七二三〕癸卯恩科三甲八十六名の進士）の「吾非斯人之徒與而誰與」（『論語』微子）の後二比の「覆」「載」「民」「物」を以て分柱す、張曉樓（張江：字は百川，又の字は曉樓。江西南城の人。？～雍正四年〔一七二六〕。雍正元年〔一七二三〕癸卯恩科二甲六十一名の進士）の「思與鄉人立」（『孟子』公孫丑上）の中二比の「與天爲徒」・「與古爲徒」を以て分柱するが如きは、是れ皆な豎の義　極まり，精堅も又た極まり，分明にして絶えて牽混（巻き添えにして混同する）移す可きの病無きなり。所謂ゆる一綫（脈絡）　さいご　到頭まで清にして且つ爽（脈絡が最後まではっきりしている）にして，毎比　他意を雜うること母き者は，亦た此れに従いて見る可し。但だ此れのみならざるなり。先輩　更に立柱・接柱の法有り。周順昌（字は景文，号は蓼洲，諡は忠介。江蘇吳縣の人。萬曆十二年〔一五八四〕～天啓六年〔一六二六〕。萬曆四十一年〔一六一三〕

癸丑科三甲二十名の進士)の「君使臣以禮」(『論語』八佾)の講下に即ち「情使」・「分使」の二意を掲出し、章大力(章世純:字は大力。江西臨川の人)の「誠之者人之道也」(『中庸』第二十章・第十七節)の起比に即ち「棄天」・「恃人」の二意を掲出し、金正希(金聲:初名は成光,字は正希,一の字は子駿,号は赤壁,諡は文毅。湖廣嘉魚の人(安徽休寧の籍)。萬曆二十六年〔一五九八〕～弘光元年〔一六四五〕。崇禎元年〔一六二八〕戊辰科二甲七名の進士)の「是則章子已矣」(『孟子』離婁下)の講下に即ち「未彰之隱」・「未全之議」の二意を提出し、中〔股〕・後〔股〕は即ち蟬聯②にして透發し、且つ兩股中以て互いに^{くら}勘べ益ます明らかなるが如きの此の三藝(周順昌・章大力・金正希の八股文)宛同一轍なり。吾茲に聊さか擧げ以て凡を發す,餘は參觀す可し(『舉業瑣言』不分卷・五葉～七葉)。

①一意可翻爲兩意:本稿「清代八股文における八股(提股・出題・中股・後股)と收股について(3)」(『經濟理論』第328号)95頁「⑦翻作兩層」条参照。

②蟬聯:『斯文規範』に「此の一故の頭もて彼の一股の尾に接し、^{べつ}別に頭腦を起こすを用いざること,蟬の鳴くの一聯に屬するが如きを言うなり」(『斯文規範』卷之三・十八葉・「一曰蟬聯」条)。

(つづく)